

炊き出しボランティア通信 vol 5 6

2012, 1月

炊きだし 1月14日(土) 9:00元寺小路教会に集合・準備。12:00炊き出し

公園に44人の方が集まりました。参加した7人の1年生は皆もう回数を重ねているので、何をしたらよいのか分からずにボーッと立っていることも(たぶん)なくなりました。炊き出しの最中、わめき声が響きました。一人アルコールが入っていたようです。炊き出し参加の時は禁止でしたが、正平教のお母さんスタッフがなだめすかしました。参加した生徒たちは、見て学習したと思います。

今回のボランティアに参加した教会の年配のご婦人から、次のように言われてドキッとしました。「高校生のお嬢さんたち、すごいわねえ。えらいわよねえ。よくこの活動に参加するわよねえ。というか、お母さんがえらいんだと思うわあ」準備が終わって公園への移動途中の車の助手席での話しでした。何をおっしゃろうとするのか初めはよく分かりませんでした。「と言うのはね、私の母がそうだったのよ。よいことであっても、できたら触れさせたくない活動ってというか、そういう意識が母にあったので。だから生徒さんのお母さん方、えらいと思うわあ」やっと意味が分かったのです。高校生になった自分の娘をホームレスの炊き出しボランティア活動に出す。列を作っているホームレスの方たちに声をかけセット品を配り豚汁を手渡し、衣類提供の時には声をかけまた話しかけられる。自分が母ならそれがさせられるか。恥ずかしことですが、わたしは長いことそのことに鈍感になっていました。炊き出しボランティア活動は、学校の了解はもちろんですが、生徒の家庭の理解と協力がなければ到底できない活動です。活動場所までの交通費も自己負担です。

『準備の後、用意したものを持って車で五橋公園へ移動する。現地ではボランティアのご婦人方の指導を受けながら、ホームレスの方たちに豚汁やおむすびをさし上げたり衣類を渡したりするのが主な仕事です。ホームレスの方たちと会話でふれあうことが一番の目的ではないので、それができなくとも悩む必要はありません。炊き出しの活動に実際に参加して、社会のありさまや人の様子に直接ふれ、そこから感じとることを大事にして下さい。』

(「炊き出しボランティア参加生徒心得」より)

今更ながら、これまでどおりご家庭の協力を仰ぎながらこの活動を継続してゆきたいと思っています。反省会でも、この話をしたところ早速生徒へ質問が向けられました。「みんなのお母さんはなんて言ってるの？」すると、「どんどん行きなさい、って言ってます」笑いが響きました。この、保護者からのありがたい後押しをけっして忘れることなく大切に始めてゆきます。ありがとうございます。



寒い中、ハイ、豚汁どうぞ。



今用意しますね。

〇顔に覚えのある人が多くて、元気そうな顔を見れて安心しました。おにぎりを今回初めて作りましたが、心を込めてつくることができました。おいしそうに食べてくれて嬉しかったです。(1年)



どうぞいらっしゃいませー。



マジ、サムイです。

○今回私はエプロンを忘れてしまって担当の方に迷惑かけてしまいました。何回もやっているのに恥ずかしいことです。持ち物をしっかり確認したいと思います。(1年)



残りわずかとなりました。

○女の子が私たちのことを覚えてくれてうれしかったです。おにぎりづくりが大変でした。次また頑張ります。(1年)



頑張った人は、こんな顔～。

献品 小学校からたくさんの献品を預かりました。ありがとうございました。

夜回り 1月11日（水）20：10～氷点下の夜。

この夜は仙台市の委託でホームレス概数調査というのが夜回りに合わせて行われた。通常とは違うコースも回りながらその人数を記録してゆく。時々ご一緒になるTさんとIさんという3人。11後夜回りや炊き出しに参加したというご婦人の3人グループとなった。

まず追廻。道が無理なので今回も案内人のおじさんと呼んでもらった。おじさんは今回も1回道をまちがえた。てれていた。そこに住む人が間違うのだから、こちらはいっこうに分からない。震災後、テニスコートまでの道のりの住宅がかなりなくなった。広い空き地のようになり、道だけ迷路のように残っている。夜なのでなおのこと分かるはずがなかった。それでも何とか集合場所の小屋根のついたベンチのそばまで到着すると、待ちかねた人たちが車のライトに映し出された。コンバンハ。コンバンハ。と言いながら、9人部の配給品を次々に運ぶ。米・おむすび2個セット・ゆで卵・カセットボンベ・味噌汁5個セット。夫婦ぐらしの人もいた。その場でみそスープをたっぷり飲んで行った。車のライトで照らす作業の中、なにか「生きる」が、身に迫ったまじわりに感じられた。

大橋下にKさんが戻っていた。また少しずつ「宝の山」を増やしていた。「警察は回ってきて、出てけーって言うんですよ」と言う。Kさん元気。ちょっと嬉しかった。評定河原橋の下には二人分をいつもおいてくる。西公園の身障者用トイレをコンコンすると、中から「ハイ」と返ってきた。「入り用な物はありませんか？」Tさんが尋ねると、「大丈夫です。」「ではお気を付けて」

大木下ベンチのSさんは12月の暮れに留置所に入ったまま出てこない。無銭飲食による。「寒いところにいるよりもと思って、自分から入りに行った様子があるようだ」その話をHさんから聞いた時、ことばが出なかった。実際にベンチに行ってみると、荷物もなかった。

炊き出しに並ぶ人は、自殺せずに生きることを選んだ人。Hさんたちから何度か聞かされた

話である。そこに集まる人のかたまりも嫌がって来ずにもがく人は、ついに病院に運ばれるか、こらえきれずに『公的機関』のお世話になるか。 セツナイ。

文責 高橋 寛

2012/02/26 (Sun) 09:26